

# 『千載和歌集』の研究

——『久安百首』秋歌の検討から——

速水 結美子

はじめに

『千載和歌集』は文治四年（一一八八年）に編纂された七番目の勅撰和歌集である。平氏都落ち直前の寿永二年（一一八三年）二月に後白河院の撰集院宣が平資盛によって藤原俊成に伝えられた。俊成は仁安年間（一一六六年～六八年）には、すでに散逸した歌集『三五代集』とみられる撰集を私に編んでいたようであり<sup>（注1）</sup>、これをもとに『千載和歌集』をまとめ上げたとされる。

すなわち、俊成は実際に『千載和歌集』を完成させる以前、約二十年も前から勅撰和歌集の準備を進めていたといえる。

本論文では、撰者である俊成自身の詠みぶりや彼の好んだ趣向を探り、それらが『千載和歌集』にどういった影響

を及ぼしているのかを検討する。

## 一 『久安百首』からみる俊成歌の特徴

『久安百首』は康治二年（一一四三年）ごろ崇徳院によって題が下され、久安六年（一一五〇年）に初度奏覧がなされた。そして、個人別百首の成立の翌年、院は百首の部類を俊成に命じ、俊成は仁平二年（一一五二年）中に全作者の一四〇〇首を主題別に部類配列し、奏覧した。これが通称『久安百首』部類本と呼ばれる第二次本である。

そして、これまでの先行研究の多くが、俊成の携わった『久安百首』部類本と『千載和歌集』の関わりについて論じたものであった。

例えば、青木賢豪氏の論文<sup>（注2）</sup>では、次のように『久安

百首』部類本の重要性を述べている。

このようにしてみると、俊成が千載集を編纂するに際しては、部類前の久安百首ではなく、自身で部類した久安百首部類本を資料としたものであり、それも単なる撰集の資料としてではなく、一部に百首の原構成を直接千載集の構成にとり入れ、利用しようとした意図をうかがうことができる。

また、山本品子氏の論文<sup>注3</sup>では、『久安百首』部類本の内容と『千載和歌集』の関連性について、時間の推移がみられることや、特に四季部において久安百首歌が連続して配置されていることを指摘されている。

俊成が『千載集』を編むにあたって『久安百首』部類本作成の経験を参考にしていることは、採られた久安百首歌や両者に共通の収録歌題の多さのみならず、『時鳥』・『月』の歌群が二分されていること、『久安百首』部類本で連続していた歌の順序が『千載集』に採られても変わっていない箇所があること、といった構成上の共通点からも窺える。そして、これらの箇所は、季節の変化、時間の推移を反映するという意図のもとに編集されていることがわかる。

しかし、部類分けを俊成が行ったことと、三十年もの間を経て俊成が『千載和歌集』中の約一割に上る一二六首の和歌を『久安百首』から採っていることは、直接繋がりを

持つとはいえないのではないか。もちろん、俊成が百首の部類分けを経験した中で得たものを、『千載和歌集』編纂に際して生かし取り入れていることはあるだろうが、あくまでも部類分けはすでに揃えられた和歌を歌題ごとに並べ替え、整理することにその目的がある。よって、選ばれた優れた詠み手の作品の中に、多少好みに反する詠みぶりや、難とする和歌があつた場合も俊成の一存で外すことができな。一方、ただひとり撰者となつた『千載和歌集』の編纂では、自身の判断で良しとする和歌のみを、多くの資料から選りすぐって構成することができる。この点については『久安百首』を部類することと『千載和歌集』編纂の大きな差異といえよう。俊成の真の嗜好は、詠み手がゆるやかな歌題設定のなかで自由に詠み上げた部類前の『久安百首』歌からみてとれる。それゆえ、部類前の『久安百首』を検討したい<sup>注4</sup>。

次にあげる歌群は『久安百首』の俊成歌、秋二十首である。『久安百首』は春部・夏部・秋部・冬部・恋部・神祇部・慶賀部・釈教部・無常部・離別部・羈旅部・物名部・短歌部といったかなり大まかな歌題設定であつた。このうち秋部を検討するが、検討にあたりこの二十首の和歌の歌材となつている語句を、私案としてそれぞれ取り出したものが次に示した表である。なお、表の各項目の最初の語句が歌題であり、歌材に「音」を詠み込んでいる和歌については

字体を変えて表記した。以下も同様である。

- 831 八重葎さしこもりにしよもぎふにいかでか秋のわけてきつらん  
 832 萩の葉も契ありてや秋風のおとづれそむるつまと成りけん  
 833 七夕の船路はさしもとほからじなど一とせにひとわたりする  
 834 みしぶつき植えし山田にひたはへて又袖ぬらす秋は来にけり  
 835 何事もおもひすつれど秋はなほ野辺のけしきのねたくも有るかな  
 836 夜もすがら妻どふしかのむねわけにあたらま萩の花散りにけり  
 837 身のうさもたれかはつらきあさぢふに恨みても啼く虫の声かな  
 838 夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなりふかくさの里  
 839 露しげき華のえごとに宿りけり野ばらや月のすみかなるらん  
 840 石ばしる水の白玉かずみえて清滝川にすめる月かけ  
 841 月よりも秋は空こそ哀なれはれずはすまんかひなからまし  
 842 月の秋あまたへぬれどおもほへずこよひばかりの空のけしきは  
 843 いかにして袖にひかりの宿るらん雲井の月はへだてこし身を  
 844 秋の月またもあひみん我が心つくしなはてそさらしなの山  
 845 月も日もわかれぬものを秋くればよをながしともたれさだめけん  
 846 夢さめむ後の世までの思出にかたるばかりもすめる月かな  
 847 此世にはみるべきもなき光かな月も仏のちかひならずは  
 848 衣うつひびきは月のなになれやさえ行くまにすみのぼるらん  
 849 山川の水のみなにかみたづねきて星かとぞみるしらぎくの花  
 850 もとゆひの霜おきそへて行く秋はつらきものからをしくも有るかな

久安百苗 俊成

831	八重葎、蓬生
832	萩の葉、秋風
833	七夕、船路
834	山田、稲、引板、袖
835	野辺
836	妻問ふ鹿、萩の花
837	虫の声、浅茅生
838	夕、野辺、秋風、鶉鳴く、深草の里
839	露、野原、月
840	月、水の白玉、清滝川、月かけ
841	月、空
842	月、空
843	月、袖、雲井
844	月、更科の山
845	月、日
846	月、夢、後の世
847	月、此世、光、仏
848	衣うつ、月
849	水上、白菊の花
850	霜、元結

まず注目すべきは、やはり840番歌から847番歌における「月」を歌材とした和歌の占める割合が非常に多い点である。また、月歌群直前の839番歌、直後の848番歌についてそれぞれみていくと、839番歌は野原一面の花ごとに露が宿り、その露に映り込む月の美しさを詠んでいる。この和歌の主題は野原の花に宿る「露」となるが、歌材として「月」も詠み込んでいる。月歌群直後の848番歌についても同様のことがいえる。冴え冴えとした月の昇る夜の描写がうら寂しく響きわたる砧の音を際立たせていることがわかるが、あくまで主題は「衣うつ」音、つまり「擣衣」であろう。二首は主となる歌材がそれぞれ「野原」「擣衣」と異なっているが、歌の素材として「月」も詠み込んでおり、歌材が

替わるに際しての移行が滑らかになるよう意図的に並べられている<sup>(注5)</sup>。俊成は和歌を詠む際、前後の和歌の語句とその歌材の繋がりを意識していたといえよう。

次に、二つ目の特徴として、多くの和歌に野原や野山などの自然のなかに見られるものが情景として詠まれている。月歌群に入るまえの和歌九首に注目すると、831番歌は生い茂った蓬生や八重葎を情景とした初秋の気配、832番歌は秋風になびく萩の葉、834番歌には山田に植えられた稲と引板の音、835番歌は野辺のけしき、836番歌は妻問う鹿に押し分けられて散りゆく萩の花、837番歌では浅茅生にとまる虫の声の情景、『千載和歌集』にも入集させている838番歌では野辺に吹く秋風と深草の里に響く鶉の鳴き声、839番歌では野原の露に月が映っている様子、というように833番歌の七夕歌を除きいずれも自然のなかに見られるものが情景として詠まれていることが指摘できよう。

さらに三つ目の特徴としては、これら831番歌から839番歌の和歌において、そのほとんどが「音」を詠み込んでおり、直接的表現はなくともそれを連想することができる和歌内容となっている。具体的にみていくと、832番歌には萩の葉が秋風になびいて揺れる際の乾いた葉擦れの音が聞こえ、直前の831番歌においても、はっきりと示されていないものの幾重にも生い茂った蓬生の葉擦れの音を思い浮かべることができよう。なお、この歌は『古今和歌集』秋上の第一首

目である169番歌「あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」を意識したとみられ、『千載和歌集』秋上の第一首目226番歌も「あききぬとききつるからにわがやどの萩のはかぜの吹きかはるらん」というように、風による秋の到来を詠んだものとなっている。また、834番歌では田畑で鳥獣を追い払うための引板の音が詠まれているなど、836番歌から838番歌における動物の鳴き声や虫の音のほかにも、多くの「音」が詠まれていることが認められる<sup>(注6)</sup>。849番歌の「山川の水のみなかみ」から思い起こされる山の主流を流れる川の情景からも激しい水音が聞こえてくる<sup>(注7)</sup>。以上のような点が俊成の『久安百首』から読み取れよう。

## 二 『久安百首』からみる顕輔・清輔歌の特徴

同時代に歌壇で活躍し、約三十年前におなじく勅撰集撰者として『詞花和歌集』を編纂した藤原顕輔と、その子清輔の『久安百首』秋部を比較検討する。

以下に俊成歌とおなじく顕輔の秋部二十首を掲げ、歌材となっている語句をそれぞれ抽出し一覧表にした。

330 ころも手のまだうすければ朝まだき身にしむ物は秋の初風

331 霧ふかき柚山おとすいかだしの岩こす棹をおもひこそやれ

- 332 秋色の玉とぞみゆる秋の野の千草の花における白露
- 333 七夕のあふ夜ときけばあぢきなくわが心さへ空にこそなれ
- 334 銀川あまがは横ぎる雲や織女のそらだき物のけぶりなるらむ
- 335 夜もすがら人まつむしの声きけばさもあらぬ袖も露けかりけり
- 336 あまつ風雲吹払ふ秋の夜は月よりほかの物なかりけり
- 337 秋の夜の月のひかりにさそはれてしらぬ雲路に行くころかな
- 338 秋風にただよふ雲のたえまよりもれ出づる月の影のさやけさ
- 339 秋はぎの花さきぬれば山里は鹿の音ちかくきかぬ夜ぞなき
- 340 しめゆひし甲斐こそなけれ女郎花心もしらぬ風になびけば
- 341 浦山し穂に出でにけり花すすきおもひこめてはくるしきものを
- 342 わぎもこがすそ野に匂ふふぢばかま露はむすべどほころびにけり
- 343 秋の田のいほさすしづのとまをあらみ月とともにや守りあかすらむ
- 344 くるたびにかりかりとのみ鳴くなるを故郷にてはいかにとぞきく
- 345 おもふらん心ぞしるきから衣ながき夜すがらうちあかしつる
- 346 あふ坂の木の下陰をひくほどはさやかにみえぬきりはらの駒
- 347 おもふ事なしもあらぬ夕ざれにこころまどはすさをしかのこゑ
- 348 秋ごとにみれば小倉の山しもぞした葉もあけにもみぢわたれる
- 349 暮れて行く秋をしむといたづらにおもひのみこそ木がらしの風

久安百首 頭輔

330	初風、衣手、朝
331	霧、山、岩、棹
332	白露、野、千草
333	七夕、夜、心、空
334	銀川、雲、織女、空薫物の煙
335	松虫の声、袖、露
336	月、天つ風、雲
337	月、雲路、心
338	月、風、雲、影
339	萩、山里、鹿の音
340	女郎花、心、風
341	花すすき、穂、浦山
342	藤袴、裾野、露
343	秋の田、庵、苔、月
344	雁、故郷
345	長き夜、心、唐衣
346	桐原の駒、逢坂
347	鹿の声、夕ざれ、心
348	紅葉、小倉の山
349	暮秋、木がらしの風

一覽表をみて明らかなように、頭輔の秋部の歌群では俊成ほど月に偏らず、駒迎えや紅葉といった堀河百首題にある歌材を用いて和歌を詠んでいる(注8)。また、音に関する歌材も、頭輔歌では335番歌の虫の声や339・347番歌の鹿の音、344番歌の雁の声といった四首に表れるのみにとどまっている。俊成歌にみられた風に揺られて起こる葉擦れの音に対して、頭輔歌での風は330番歌のように肌寒さを感じさせる風であり「音」を詠んではおらず表れているとはいえないだろう。他にも、336番歌のように雲を払うための風、340番歌の女郎花の花をなびかせる風というように頭輔の詠む風は「音」を感じるための風ではない。秋部最後の449番歌に詠まれる風についても同様に、「木がらし」に「焦がる」

を掛けており、風の情景というよりも技巧的な表現として風を使用している。

また、339番歌から342番歌に顕著なように、顕輔も草花といった自然を歌題として和歌を詠んでいる。しかし、鹿の音を詠み込んだ339番歌以外では、恋や女性を連想させる機智的な表現として用いているのである。女郎花は女性に喩えられることが多いが、340番歌は末の「心もしらぬ風になびげば」で、「なびく」という語句を用いて、浮ついた徒っばい人間の心のさまを詠み込んでいる。また上句の「しめゆひし甲斐こそなけれ」からも、自分と相手とを結びつけるといふ人間的描写がみとれる。次に341番歌であるが、心中の思いが表に出てしまう点が『古今和歌集』の「花すすき我こそしたに思いしかほにいでて人にむすばれにけり(秋上・748)」に似通った詠みぶりとして表れている。最後に342番歌の藤袴は「裾」「ほころぶ」といった表現を伴って用いられている。つまり、これらの草花は単に植物、すなわち自然として情景に詠まれているのではなく、人やその心のさまを表しているのである。これらの特徴は、自然の情景を多く和歌にとり入れている俊成とは大きく異なっている点といえよう。

おなじく『久安百首』秋部清輔歌二十首についても詳しく比較する。

- 933 山里は庭のむら草うらがれてせみのなくねも秋めきにけり  
934 おもひやる心もすずし彦星の婦まつよひのあまの羽ごろも  
935 あだし野とひとはいへども女郎花くる秋ごとに色もかはらず  
936 女郎花あだにはたれもおもはぬをなにをあかすと露けかるらむ  
937 わが宿のもとあらの萩の花ざかりただ一むらの錦とぞみる  
938 うす霧のまがきの花のあざじめり秋は夕とたれかいひけむ  
939 秋の野のはぎの錦にとちられて駒うちいれむひまだにもなし  
940 たつたひめかざしの玉のををよわみみだれにけりとみゆるしら露  
941 高砂の尾上の風やさむからんすそのの原に鹿ぞなくなる  
942 霧のまにあかしのせとに入りけり浦の松風おとしるしも  
943 しほがまの浦吹く風に霧はれて八十鳥かけてすめる月影  
944 筑波山しげきかひなし秋の夜の月の入るにはさはらざりけり  
945 おもふ事有りとなければ秋の夜のおさ戸あけてぞながめられける  
946 夜を残す老の寝ざめにおきるつつ秋のともしびかかげ尽しつ  
947 ひにそへて声よわり行く蜚いまいくよとてつづりさすらん  
948 かざりなきよはひのみかはみるままに心ものぶるしら菊の花  
949 春ながらとしはくれねと思ひしは紅葉みるにぞくやしかりける  
950 立田山松のむら立なかりせばいづくかのこるみどりならまし  
951 山下のかげなかりせばわが宿の庭のみちを誰はらはまし  
952 鳴く虫のいのちとみゆる秋なればくるはさこそかなしかるらめ

## 久安百首 清輔

933	山里、蟬
934	彦星、孀、天の羽衣
935	女郎花、あだし野、色
936	女郎花、露
937	萩、錦
938	霧、まがきの花、朝
939	萩、錦、駒
940	龍田姫、白露
941	鹿、高砂の尾上の風、裾野の原
942	霧、明石の瀬戸、松風、音
943	風、塩竈の浦、霧、月影
944	秋の夜の月、筑波山
945	秋の夜、朝戸
946	寝ざめ、秋の灯
947	葦
948	白菊の花、心
949	紅葉
950	紅葉、立田山、松の叢立
951	紅葉、山下の風
952	鳴く虫、秋

清輔歌も顕輔歌とおなじく俊成歌に比べて月を歌材とした和歌はわずかに二首ほどと少なく、秋の風物である紅葉や名所などさまざまな歌材を詠んでいる。「音」が情景に組み込まれている和歌についても、933番歌の蟬の声、941番歌の鹿の声、942番歌の松風の音、947番歌の葦の声、952番歌の虫の音と、顕輔歌より一首多く五首となつていているもの、俊成歌の九首には及ばない。また、風の「音」に関して検討してみると、943番歌に見られるように、霧を払うための風であるなど、俊成歌のように風で「音」を表現する試みは認め得ない。自然のなかに見られるものを詠んだ和歌についても、935・936番歌の女郎花歌二首のように、顕輔とおなじく花そのものの情景というよりも、女性に見立てて恋

の情景を比喩的に詠んでおり、俊成歌とは趣が異なっている。

## 三 『千載和歌集』 秋歌の検討

つづいて『千載和歌集』の秋歌の検討を行う。以下に、秋上・秋下の226～301・302～386番歌を先ほどと同様に一覽で載せ、それぞれに歌題と歌材となる語を抽出した。なお、表の各項目の最初の語句が歌題となるが、題知らずについては前後の和歌などを参考に、私案として題を選定した。また、『久安百首』から俊成が自撰した和歌には網かけを施している。

—まず、『千載和歌集』における俊成の自撰歌に注目すると、秋上・秋下の俊成自撰歌は次の四首であり、そのすべてに声や音が詠まれている。

229やへむぐらさしこもりにしよもぎふにいかでか秋のわけてきつらん  
259夕されば野べのあきかせ身にしてみてうづら鳴くなりふか草のさと  
284石ばしるみづのしら玉かずみえて清滝川にすめる月影

333ざりともとおもふころもむしのねもよわりはてぬる秋のくれかな  
先に述べたように、229番歌は前後の和歌に風の描写があることから、秋風による葉擦れの音が表現されているよう。そして、俊成の代表歌ともいえる259番歌では、自然のなかに見られるものとして「うづらの鳴き声」が詠まれる。284

千載和歌集 秋上

226	立秋、萩の葉風	252	女郎花隨風、女郎花、秋風	278	月、碓捨山、夕暮、空
227	立秋、浅茅生、露	253	女郎花、涙、露、袖	279	月、空、庭、冬の氷
228	秋たつ心、森、風	254	女郎花、風、まがき、枕	280	月、更科の山、心
229	八重葎、蓬生	255	野徑秋夕、茅、虫の音	281	水上月、野地の玉川、萩、色、浪
230	初秋、萩、風	256	宮城野、花、虫の音	282	月、玉、浦回の風、空、光
231	初秋、木の葉、色、秋風、涙	257	野花留客、野辺、宿、旅寝、栖	283	月、小夜、富士の高嶺、煙
232	社頭立秋、松、風、音	258	秋、野辺、野辺、心なき人	284	月、水の白玉、清滝川、月影
233	萩、萩のうは風	259	夕、野辺、秋風、鶉鳴く、深草の里	285	月、塩竈の浦、風、霧、月影
234	初秋、秋風、涙、おとづれ、袖	260	秋夕、菅原、伏見の里、夕暮	286	月毎秋友、年、夜
235	七夕、夕、空	261	草花、宿、鹿の音、野辺、秋風	287	月、山の端、真澄の鏡
236	七夕、秋風	262	野花露、野、千草、色	288	月、天の川瀬
237	七夕、天の羽衣、契	263	露、草木、野、山	289	月、氷、志賀の浦波
238	七夕、枕、塵	264	露、袂、夕露	290	月、秋の野、萩のうは風
239	七夕、枕	265	露、竜田姫、白露	291	海辺月、心、明石の沖、月影
240	七夕、花ぞめ衣、あか月	266	露、夕、萩、風の音、袂	292	月、八百日、浜の真砂
241	七夕後朝、天の川、心、袖、暁	267	露、袂、涙	293	月、御手洗川、音、氷
242	刈萱、下葉、心	268	嵯峨野花、花すすき、心	294	湖上月、月影、氷、浪、志賀の唐崎
243	刈萱、草葉、風	269	古里、庭、野辺	295	月前虫、影、浅茅原、雪のした、虫
244	刈萱、鹿、野地	270	山里、宿、鹿、野辺	296	月照草露、浅茅原、葉末、露、月影
245	草花告秋、風、山里、花すすき	271	思野花、穂、岩田の小野、薄	297	月、わが世の秋
246	刈萱、上葉、秋風	272	秋、夕、小野、浅茅生、玉、心、風の音	298	月、身のうさ、涙
247	萩、夕影、ひぐらしの声	273	秋山、青葉の山、色	299	月、心
248	萩、秋山、まがき	274	月、夕月夜	300	月、東雲
249	萩、宮城野、牡鹿、声、色	275	月、高嶺、雲、空	301	瀨底月、旅寝、葛城山、谷川
250	萩、千草、色、袖	276	月、こがらし、雲、高嶺		
251	女郎花、露、袖	277	月、更科の山		



千載和歌集 秋下

302	秋思、唐土、寢覚め	331	虫、夜	360	月照紅葉、紅葉ば、月の光、錦
303	秋風、山里、こがらし、夕暮、ひぐらし	332	蟋蟀	361	関路落葉、山おろし、紅葉、須磨の関守
304	秋の夜、松、風、琴	333	虫、心、秋の暮れ	362	関路落葉、清見潟、関、船、嵐、木の葉
305	野風、露、秋の野、風	334	虫、化野、月の影	363	関路落葉、紅葉ば、関守の神、逢坂山、木がらし
306	夕暮、小野の萩原、風、鹿	335	月、未葉、色	364	関路落葉、紅葉ば、白川の関
307	三室山、嵐、鹿	336	九月十三夜、水、影、今宵、月	365	関路落葉、都、紅葉、白川の関
308	杣、小牡鹿、妻問ふ	337	十三夜、月、心、今宵一夜	366	湖上落葉、さざ浪、比良の高嶺、山おろし、紅葉、海
309	鹿、秋の夜、尾の上	338	月前擣衣、小夜、砧、月、衣	367	落葉、竜田山、松の叢立
310	小牡鹿、野辺、涙	339	擣衣、妹、唐衣、砧	368	落葉、岩田の小野の杵原、時雨、紅葉
311	牡鹿、夕べ、山里、露、まがき	340	擣衣松風、衣うつ、玉川の里	369	禁庭落葉、紅葉ば、錦
312	夜泊鹿、湊川、浮き寝、生田、小牡鹿	341	擣衣、唐衣	370	大井河、嵐の山、紅葉、名
313	鹿、浮き寝、猪名の湊、松風	342	旅宿擣衣、衣うつ、里、草枕	371	大井河、紅葉、峰の嵐
314	小牡鹿、夜、明石の瀬戸	343	霧、夕霧、袖、露	372	紅葉、手向の山、紅葉ば、幣、名
315	鹿、湊川、夜舟、追風、瀬戸	344	暮草花、黄昏時、藤袴	373	落葉、竜田山、麓の里、風、紅葉
316	鹿、声向方、宮城野、小萩ヶ原、鹿	345	夕霧、岩間、戸無瀬の夜	374	落葉、杵ヶ原、色、風、紅葉
317	鹿、小牡鹿、妻呼ぶ、夕	346	残菊、霜、翁、白菊の花	375	松間紅葉、色、松吹く風、杵、紅葉
318	鹿、袖、露	347	月照菊花、白菊、露、月影	376	故郷紅葉、故郷、庭、木の葉、色、河原の松
319	鹿、山里、晓方、夜半	348	雛菊如雪、雪、まがき、白菊の花	377	落葉、木の葉、風、庭
320	鹿、身、暮れ、妻	349	菊、朝、籬、露、色	378	落葉、秋の田、紅葉、山里
321	鹿、夕間暮れ	350	菊、光、霜、月、白菊の花	379	紅葉、谷の小川、色、木の葉、水、時雨
322	鹿、秋の夕べ	351	秋の心、愁へ	380	落葉浮水、水、紅葉、山河
323	牡鹿、み山の里、明方、空	352	野風、葛、色、風の気色	381	九月尽、紅葉ば、風
324	小牡鹿、露、妻恋ひ、小野の草ぶし	353	紅葉、初時雨、葛城山、色	382	山寺秋暮、山里、鐘、秋の暮れ
325	小牡鹿、尾の上、門田、秋風、稲葉	354	紅葉、叢雲、時雨、紅葉ば、色	383	九月尽、唐錦、幣、手向の山路
326	驚かす音、小山田、さびし	355	時雨、四方の梢、色、夕	384	九月尽、秋風、野辺、気色、面変わり
327	引板、門、室の刈り田、鳴	356	紅葉、色、小倉山、紅葉ば	385	紅葉、竜田山、紅葉ば、麓
328	虫、浅茅、未葉、色	357	紅葉、竜田姫、紅葉、錦、色	386	今宵、神代
329	蟋蟀、秋の夜	358	紅葉留客、故郷、紅葉ば		
330	虫、声非一、浅茅ヶ原、虫	359	紅葉、山姫、千重の錦、紅葉ば		

番歌の「石ばしる」は枕詞としても知られているが、水が岩の上を激しく走り流れる様子を詠んでおり、「みづのしら玉」が飛散っている情景からも激しい水音がきこえよう。最後の333番歌では、秋の暮れゆくさまを虫の音が弱くなつてしまったことになぞらえて詠んでいる。そもそも、鹿の鳴く声のような一般的な音の素材が『千載和歌集』秋上・秋下に十九首あり、多く詠まれているが、俊成は259番歌の鶉の声や284番歌の水流の音など、他にはみられない音や声を詠み込んだ自身の和歌を『千載和歌集』に加えることで、集全体の音の表現を豊かにしていることが読み取れる。

加えて、284番歌には、水の描写と同時に月の光が詠まれている<sup>(注9)</sup>。『久安百首』でも「月」を秋歌の半数にわたる歌材としている俊成の、秋の月を重要視している特徴がここにも表れているのではないか。実際に『千載和歌集』に詠まれている月を歌材にした和歌は、秋上・秋下だけでも三十五首に上る。

また、この月歌と同様に『千載和歌集』において多く使われている歌材に、鹿の鳴く声があり、その数は十九首に及んでいる。鹿の声のみならず、秋部上下全体で見たととき、秋上では226番歌から301番歌までの七十六首中、三・八割の二十九首、秋下では302番歌から386番歌までの八十五首中、五・六割の四十八首で「音」を情景に詠んでいることがわかった。秋上では、七夕歌群や月歌群といったように、あ

る程度歌材の定まったものが多いことを考慮しても、高い比率を示しているといえよう。

以上のことから、部類前の『久安百首』俊成歌では、顕輔歌や清輔歌に比べて多様な「音」を詠み込んだ和歌が多かったが、『千載和歌集』においても同様のことがいえることがわかった。

#### 四 『詞花和歌集』 秋歌の検討

『千載和歌集』では月歌や自然の情景を多く詠み、音を表現する歌材を多岐に渡って意図的に取り入れているが、これらの特徴は、『詞花和歌集』ではどのようであるか、比較していく。以下に藤原顕輔の編んだ『詞花和歌集』の秋歌を『千載和歌集』と同様に一覧にした。なお、網かけを施した箇所は前と同様に『久安百首』から顕輔が自撰した和歌である。

『詞花和歌集』の秋部では、鹿の声が詠まれた和歌は124番歌と125番歌の二首にとどまっており、『千載和歌集』に比べ極端に少ない。代わりに『千載和歌集』で七首にとどまった七夕歌を、秋部全体の二割近い十首採っているなど、その差異が顕著に表れている。一方で、『詞花和歌集』において月歌は十三首入っており、全体を踏まえるとその比率は高いといえよう。しかし、採っている月歌の特徴が千

詞花和歌集 秋部

82	秋風、山城の鳥羽田	102	八月十五夜、引駒、影、逢坂、月	122	虫、秋風、露、涙、心
83	秋の初風、生田の森	103	月、秋の夜、露、心	123	駒迎、逢坂、杉間、月
84	七夕、萩の葉、果がく糸、ささがに	104	月を待つ、秋の夜、心、山	124	鹿、妻
85	七月七日、七夕、衣、墨染の袖	105	月浮山水、秋山、清水、曇り	125	鹿、秋萩、枕
86	七夕、心、空	106	月、秋の夜、心、雲居	126	月照菊花、菊、月
87	七夕、天の川、かささぎの橋	107	萩の葉、風、秋の夕暮れ	127	白菊、霜枯る、色
88	七夕、天の川、雲、織女、空薫物の煙	108	萩の葉、秋風、露	128	菊、目離れ
89	七夕、天の川、瀬	109	秋風、色、身	129	白菊、草枯れ、冬、露霜
90	七夕、天の川、たまはし、浅瀬、夜	110	秋風、三吉野、象山、松	130	白河、見行客、陸奥の安達、檀、紅葉
91	七夕後朝、逢ふ夜、明くる空	111	萩の葉、露、こがらし、音	131	二村山、紅葉、錦
92	七夕後朝、天の川、七夕	112	霧、初瀬山、いりあひの鐘、音	132	紅葉ば、夕、山、夜
93	七夕後朝、天の川、水、七夕	113	嵯峨野の花、心	133	紅葉、山里、道
94	水上月、水、月	114	朝顔の花、神垣、夕隠る	134	紅葉、大井河、春雨、水の面、錦
95	月、空、月影	115	藤袴、野	135	雨後落葉、時雨、木の葉
96	月、空、秋の夜	116	萩、朝、露、心	136	月、散紅葉、風
97	月、身、今宵	117	萩の葉	137	紅葉、網代木、水魚、夜
98	月、世の中、秋の夜	118	露、秋の野、草叢、夜、虫、涙	138	初霜、野辺、浅茅、色
99	月、秋の夜、月の光、影	119	虫、八重葎、宿	139	雨中九月尽、我が宿
100	月、天つ風、雲、秋の夜	120	虫、心		
101	月、秋の夜、心の隙	121	鈴虫、故郷、鳴海の野辺、夕暮れ、声		

載・詞花兩集で異なっている。

『詞花和歌集』の94番歌から102番歌までの九首に及んでは、詞書に「三条太政大臣の家にて、八月十五夜に水上月ということをやめる」、「関白前太政大臣の家にて、八月十五夜のころをやめる」とあるように、すべてが八月十五日の完全で美しい満月を詠んでいる。しかし『千載和歌集』秋上・秋下において、三十五首に上る和歌のうち、八月の十五夜を詠んだものは一首も見受けられない。『千載和歌集』では、336番歌と337番歌において「後冷泉院御時、九月十三夜の月宴侍りけるに、よみ侍りける」、「十三夜のころをやめる」とあるように、八月十五日の夜について月が美しいとされている九月十三日の夜の月を詠んだ和歌を入集させているのである。兩集を比べてみると、ここにも俊成・顕輔両撰者の価値観の細かな違いを見て取ることができる。

また、『千載和歌集』における『久安百首』俊成自撰歌に注目したように、『詞花和歌集』の顕輔自撰歌についてみる。

88あまのはよこぎるくもやたなはたのそらだきものけぶりなるらん  
雲を七夕の織女の薫きしめた「そらだきものけぶり」と詠むなど知巧性に富んだ内容になっている。また、『詞花和歌集』において七夕歌群は十首と十分多く、顕輔はそこに自身の歌を加えており、俊成に比べて、人の行事であ

る七夕題を重要視していることがわかる。

先にも挙げたとおり、『千載和歌集』では秋上の歌の三八割、秋下の歌の五・六割という高い比率で何らかの音を詠み込んでいた。一方で、顕輔が編んだ『詞花和歌集』秋部では、82番歌から139番歌までの五十八首中、二・四割にあたる十四首で音を和歌に詠んでいる。数値からしてみても、両者の差は明らかである。また、同じ音であっても『詞花和歌集』では107番歌や108番歌のように萩の葉風の音や、鹿の声、虫の音といった表現が主であり、俊成のように、多岐に及んで音を詠み込もうとはしていない。ここにも『久安百首』の詠みぶり同様、撰者の趣向の差異が表れている。

おわりに

以上、部類前の『久安百首』秋歌における俊成・顕輔・清輔の三者の和歌の検討、『詞花和歌集』との比較考察から、『千載和歌集』秋上・秋下には部類前の『久安百首』俊成歌の特徴が反映されていることが明らかとなった。つまり、『千載和歌集』には若かりし頃の俊成の詠みぶりが色濃く打ち出されている。『久安百首』にみられた三点の特徴のうち『千載和歌集』に反映されているのは、特に自然の中の「音」への関心であろう。

こうした、和歌の情景に音を詠み込むことに価値をお

き、さまざまな音を豊かにとり入れようとする俊成の特徴は、何に起因するのであるか。おそらく、若かりし頃の俊成の今様との関わりが大きな影響を持っているのではないか。今様は独特の音律をもって「声に出して歌う」ものであった。大野順子氏<sup>(注10)</sup>は「俊成の実作には今様の影響を受けた歌々が幾つもみられ、さらには後代に影響を及ぼす可能性の高い歌合判にも今様を取りこまれていた様子」がある<sup>(注11)</sup>と指摘している。『久安百首』に今様をとり入れた和歌があることや、歌合判詞に今様が用いられている点<sup>(注12)</sup>は、俊成が音を重視することからきているのではないか。俊成の理想の和歌についての記述が、『古来風躰抄』に次のようにある<sup>(注13)</sup>。

歌はただよみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにも聞ゆる事のあるなるべし。もとより詠歌といひて、声につきて善くも悪しくも聞ゆるものなり。

和歌が「詠歌」と呼ぶごとく、詠み上げる際の音の響きによって和歌そのものがよくも悪くも変化すると捉えている。『千載和歌集』下命者の後白河院は、和歌にはあまり熱心に関わりとうしなかったが今様にはいたく熱中した。俊成は後白河院の好んだそのような今様を肯定的に受け止め、和歌の世界に生かそうという意識を持っていたのではないか。この点についてはさらに調査をし、考えていきたい。

い。

本論文中における和歌の引用は、断りのない限りすべて『新編国歌大観 CD-ROM Ver.2』(『新編国歌大観』編集委員会監修 角川書店 二〇〇三年)による。

注

- 1 順徳天皇の記した『八雲御抄私記』に「三五代集俊成」とあり、仁安年間には撰集作業が開始されていたことが『長秋詠草』『山家集』『清輔集』など各家集の内部徴証によって明らかとなっている。
- 2 青木賢豪「千載集の撰集資料について―堀河・久安両百首の場合―」『季刊文学・語学』第四十九号 一九六八年九月
- 3 山本晶子「『久安百首』部類本から『千載和歌集』へ―編集方針の継承と展開―」『筑波大学平家部会論集』第七巻 一九九九年
- 4 部類前の『久安百首』に関する論文に細川知佐子氏の「俊成の『久安百首』「春」と「秋」の歌材と構成―頭輔との比較を中心に―」(『國語國文』第七十六巻第十号 二〇〇七年十月)がある。
- 5 に関連して、細川知佐子氏は(注4)において、「月の歌群の最後に、季節の流れを次へと送る歌材である掃衣を取り合わせた手法」と述べている。
- 6 細川氏は(注4)の論文において次のように述べている。「6の妻問いの鹿の声、7のあたかも誰かを恨むような虫の声、という秋の物悲しい情景を一層際立たせる声の重なるの最後に、8の『伊勢物語』深草の女の化身「鶉」の鳴く声が 詠まれているのである。そして、この歌を境として、9では一転静寂の中にある月の歌と

なり、動物の物悲しい声のする情景から、静寂への転換がなされているのである。つまり「夕されば」は、音を重視した構成配列の中で生み出された秀歌ということもできよう。加えて、月の歌群の後には、擣衣の「衣うつ響き」が詠まれており、哀切な鶉の声は、月の歌群を挟んで、寂寥感漂う砧の音へと続く趣向となっている。

7 831・832番歌から想像される葉擦れの音、849番歌から思い起こされる「山川の水のみなかみ」について、細川氏の（注4）の論文では述べられていない。

8 堀河百首題を多く詠む傾向があることが、（注4）の細川氏の論文で指摘されている。

9 渡部泰明氏は、「千載和歌集に照る月」『上智大学国文学紀要』（第十三号 一九九六年三月）において、284番歌では「清滝川のたぎりゆく清冽な流れのさまと、その水飛沫一つ一つを輝き照らす月の明るさ・美しさ」が同時に表現されていると述べている。

10 大野順子「藤原俊成の和歌と今様」『中世文学』第五十五号 二〇一〇年六月

11 具体的には、「六百番歌合」や「千五百番歌合」の判詞においてみられる。前掲（注10）の大野氏の論文の指摘による。

12 橋本不美夫他校注『新編日本古典文学全集 第八七巻 歌論集』小学館 二〇〇二年一月

（はやみ ゆみこ）